

る方法)の導入により生産の急拡大が可能となった。中国の需要がなければポトシ銀山から大量の銀が産出されることもなかったであろうし、また逆にポトシ銀山がなかったら中国の通貨改革が達成されることもなかったかもしれない。

## II 何故ヨーロッパはかくも長い間中国に追いつけなかったのか

### 1. ローマ帝国崩壊後の西ヨーロッパ

東西ローマの分裂(395年)の頃から西ローマ帝国の衰退がはじまっていたが、西ローマ帝国の滅亡(476年)以後西ヨーロッパは統一国家の解体、農地の荒廃、経済の分断化・自給自足化、人口の減少に直面することになった。5世紀末からこの地域を襲った疫病も人口の減少の一因となった(Wickham, 2005)。フランク族は481年にメロヴィング朝を開いた。新興のイスラム教徒(サラセン人)が714年にイベリア半島を征服し、さらにフランク王国の中心部にまで攻め上がったが、732年にツール・ポワティエの戦いに敗れ、ピレネー山脈の南へと戻った。メロヴィング朝を継いで751年に発足したカロリング朝はシャルルマーニュ国王(在位768-814年、800年ローマ法王レオにより戴冠)の下で繁栄に向かったが、シャルルマーニュ没後国土は三人の息子に三分割された(843年、東西フランク王国及び、ロタール王国)。

8世紀にはサラセン人をはじめ、ノルマン人(ヴァイキング)人やマジャール人の襲来が活発化した。広域的な国家権力が確立していないなかで外敵の襲来から集落またはその共同体を守るために地域的な権力の擁立が封建制の背景となったと考えられている(ブロック, 1939)。その後侵入者の土着化が進み、フランスに成立したノルマンディー公国(910年)によるイギリス征服(ノーマン・コンクエスト, 1066年)を最後に侵入は終わり、西ヨーロッパ各地に封土(fief)と臣下(vassal)を軸とした封建制が定着することとなった。

当時のヨーロッパにとって先進地域は、ギリシャ文明を継承するビザンティン帝国と、アジアとの貿易によって利益を上げるとともに同じくギリシャ文明を継承していた東方のアラブ・イスラム勢力であった。西ヨーロッパは十字軍(第1回1099年、以後1272年まで9回に及んだ)の派兵によって巻き返しを図ったが、聖地エルサレムの奪回(1099年-1187年)やコンスタンチノーブルの占領(1202-1261年)に一時的に成功するにとどまった。医学、数学、天文学、哲学をはじめとする学問の中心地はイスラム教徒が支配するイベリア半島の首都コルドバ(756年-)であり、「知恵の館」(830年に設置)を擁したアッバース朝下のバグダッドであった。西ヨーロッパにおける「12世紀ルネサンス」はこれらの学問が伝えられたことによるものであった(ベルジェ, 1996)。

## 2. イスラム世界の急拡大とイベリア半島支配

イスラム世界が世界史上類をみない急拡大を遂げたのはムハンマド（モハメッド）が没した共通暦（西暦）632年以後である。イスラム軍はまずアラビア半島から地中海東部に進出してシリア、パレスティナ、アレクサンドリア、エジプトを破り、イラク、イランを占領し、さらに東進してウズベキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インドのインダス川流域に至った。イスラム勢力は661年にダマスカスを首都としてウマイヤ朝を開いた。その後750年にはウマイヤ朝は内乱に破れアッバース朝が成立した。アッバース朝の首都は776年にバグダッドに移転した。

西方に話を戻すと、ウマイヤ軍が北アフリカを西進してジブラルタル海峡を渡ったのは711年である。北アフリカの西進はベルベル人の頑強な抵抗にあって手間どったが、海峡を越えた後は快進撃に転じた。ウマイヤ軍は716年までにわずか5年ほどでイベリア半島のほぼ全域を平定した。イベリア半島はもとはローマ帝国の属領だったが、5世紀後半から西ゴート人に支配されるキリスト教国になっていたのでここにこれも世界史上例のないイスラム教徒によるキリスト教徒および同地に住んでいたユダヤ教徒に対する支配が実現することとなった。その後756年にウマイヤ朝の血統を継ぐアブドル・ラフマーンがアンダルシア入りして王位につきコルドバを首都として「後ウマイヤ朝」を開いた。その後カトリック教徒による国土回復運動によって次第に狭まったもののイスラム教徒によるイベリア半島支配は1492年に最後のイスラム王朝がグラナダを去って半島を退くまで780年もの間続いた。

イベリア半島進出に際してのイスラム教徒側の基本方針は軍事力によって強引に征服するのではなく、政治的服従と追加課税を前提に住民の生命、財産、身分、信仰の自由などを保証し、事実上の自治を認めるという寛容度が高いものだった。その背景にはイスラム側の人的資源が限られていたことや、ユダヤ教徒とキリスト教徒を「啓典の民」（同源の一神教徒）とみなしていたこともあったが、結果としてこのやり方が、侵入に際してもその後の統治に当たっても奏功した。カトリックの三位一体論に異論を唱えて迫害を受けていたキリスト教徒や西ゴート時代に宗教的弾圧を受けていたユダヤ人の支持があったことも有利な条件だった。イスラム教の教義が単純でわかりやすいものであったことと教会組織が簡素なものだったこともプラスに働いたと思える。社会経済的にみるとイスラム国の大発展はユーラシア大陸の中央部を占め、地中海、インド洋、を結ぶ結節点に位置したことが当時の国際的な商業の利益を最大限に享受しうる立場にあったことと密接に関連していることを否定することはできないだろう。

西ヨーロッパ諸国は1099年の第1回を皮切りに十字軍を送り失地回復につとめ、一時

的にエルサレムやコンスタンチノーブルの回復に成功した時期もあったが、全体としてアラブ、イスラム及び東方勢力の優位は揺るがなかった。

### 3. 13世紀のユーラシア大陸のグローバル化

西ヨーロッパの興隆に先立つ13世紀に、ユーラシア大陸の東と西を結ぶ広域的な交易のネットワークがすでに存在していたことはアプー・ルゴドの著書（ルゴド、1989）によってよく知られるようになった。アプー・ルゴドは大陸北方の絹の道、紅海またはペルシャ湾からインド洋を経由する二つの海の道、計三つの道を通じる交易の変遷をモンゴル帝国の制覇と分割、イスラム勢力の台頭などを背景に詳細に描き出している。14世紀の初頭に最盛期を迎えたこの世界システムは、その直後に、交易の活発化を背景とした黒死病の広域伝播により崩壊し、16世紀に西ヨーロッパの進出下に再構築されることになる。

### 4. ギリシャ文明の継承と発展およびヨーロッパへの伝達

ギリシャ文明は第一義的にはビザンツ帝国に引き継がれた。しかし学問的文献に関する限り、一部は失われた。古代最大の図書館といわれたアレクサンドリアにあった図書館は4世紀末に教皇テオフィリウスの時代にギリシャ異教の象徴として破壊された可能性が大きい。残された文献も多かったと思われるが温存されるだけで活用された形跡がない。ビザンツ帝国の領土でイスラム教徒が奪ったシリアやエジプトなどの文献をはじめとして多数の文献がギリシャ、ペルシャ、インドなどから収集されたのはアッバース朝の首都バグダッドに作られた「知恵の館」である。「知恵の館は単なる図書館ではなく」翻訳センターでもあり、研究センターでもあったから各地から優秀な人々が集まった。翻訳は主としてギリシャ語からアラビア語への転換であった。内容としては天文学、医学、数学など自然科学的な分野に重点が置かれていたので、「科学の館」のような様相を呈していたともいわれている。有名なフワーリズミもこの館の研究員であり、方程式の解法を案出した。アルゴリズムという言葉は彼の名前に由来している。天体の動きと引力を研究していた研究者の一人はニュートンの万有引力の先駆けとなる研究成果を発表していた。これは天界と地上の法則を厳密に区分していたアリストテレスの自然学とまったく異なるもので、このことだけから見ても、単なる翻訳以上の研究の発展が行われていたことが窺われる。

11世紀の前半から12世紀の前半にかけて最も重要なギリシャ文明の研究センターはコルドバに移った。コルドバではギリシャ語からアラビア語、アラビア語からラテン語への翻訳作業と並行して翻訳者による詳細なコメントが付されたり、別の形で独自の意見が発表されたりした。コルドバには多くの優れた学者が集まったがそのなかの一人にイブン・

ラシユド(ラテン名アヴェロイス, 1126-1198年, コルドバ生まれのユダヤ人)がいた。彼はアリストテレスの注釈者として著名でありヴァチカン美術館にあるラファエロの「アテネの学堂」という絵画の登場人物のなかにソクラテス, プラトン, アリストテレスらと一緒に描かれている。

イブン・ラシユドはアリストテレスの「アニマ」という作品の注釈で「知性が普遍を構成する」と述べてアリストテレスの考えをいっそう明確にしている。当時の神学が普遍は実在する(だから原罪はだれにでも当てはまる)としていたことと真正面から衝突した。こうした新しい自然哲学はレコンキスタが進むなかで1150年代から続々とラテン・キリスト教国に伝えられたが, 1250年にはアリストテレスとイブン・ラシユドの学説についてパリ大学の講義で取り上げられることを正式に禁じられるなど大騒ぎとなった。当時の進んだ学者(アベラール)や学生はみなアリストテレス, イブン・ラシユド派であり禁止は実効を挙げなかったが, アベラールの場合のように大学から追放されるなどの大きな犠牲も払われた。

ローマ帝国崩壊後のラテン・キリスト教国(西ヨーロッパ)はアルプスの北に隔離されたまま何百年もアリストテレスの名も聞かぬまま過ごしていた。アラブ・イスラム経由ではじめてギリシャ諸学とその発展型が伝達されたときの衝撃の大きさをこれらのエピソードが雄弁に物語っている。ギリシャ以来の進んだ知見の受け入れを阻んでいたスコラ哲学の崩壊によって, ラテン・キリスト教国はこのときはじめてルネッサンスと17世紀科学革命への糸口をつかんだのだった。

## 5. 黒死病とその衝撃

ユーラシア大陸規模の交易に沸いた中世最盛期がそろそろ終わりにさしかかった頃ヨーロッパを襲った大惨事は黒死病である。黒死病が西ヨーロッパではじまった1348年はちょうどその入り口にあたる時期であった。黒死病は小氷河期ともよばれる気候の寒冷化と関係があったとされている。小氷河期自体は1350年から1900年まで続いたが, 気温が底を打ったのは17世紀の前半であり17世紀後半からは上昇に転じている。小氷河期の原因と考えられているのが太陽活動の低下である。太陽活動の低下が著しかったマウンダー極小期は1645-1715年であり, 小氷河期における最低気温の時期とほぼ一致している(Behringer, 2011)。気候変動の要因は太陽活動の変動以外に噴火の影響も考えられる。小氷河期間中は火山活動の高揚がみられ寒冷化の約2割程度は火山活動のせいだったと推計されている(Jones, P. D. et al., eds., 2001)。このほかに気流や海流の変動も影響する。

黒死病はその後も幾度となくヨーロッパを襲いヨーロッパの人口の三分の一かそれ以上の人々を死亡せしめたといわれているが, このことに注目するだけでは黒死病の影響を過

小郡藩衛あるととなる黒死病による人口減滅は死者数急激増加だけでなく、その  
 のとによる出生機が失われたことによる人口減滅をも含め長期期的とらえる必要  
 ある。

例えば今でも引用されることの多いハッチャーの推計 (Hacher, 1977) によるイギリス  
 の人口の動向では、表 2 のようになっている。

表 2 ハッチャーの推計によるイギリスの人口動向

年	人 口 (人)
1300	約 600 万
1350	約 300 万
1450	約 200 万
1750	約 600 万

出所：Hacher, 1977

黒死病による直接・間接の人口減少が長期にわたって続いたのち黒死病以前の人口水準  
 を回復したのはイギリスでは 1750 年であり、人口水準回復に 450 年かかったことになる。  
 もっと新しい推計 (Malanima, 2009；Broadberry et al., 2010) によっても黒死病以前の  
 人口水準の回復が実現したのは 1600 年ないし 1650 年頃であり、黒死病以前の人口水準の  
 回復に要した期間は 300 年ないしそれ以上に及んでいる。

表 3 イギリスの人口

年	人 口 (単位：万人)
1292	478
1300	452
1315	491 ピーク
1348	439
1351	280
1377	260
1400	220
1450	184 ボトム
1490	211
1560	302
1600	411
1650	531 水準回復に 335 年
1700	520

出所：Broadberry, et al., 2010

黒死病による人口減少は極度の労働不足を意味し、農業生産も影響を受けたが疫病の影響を受けなかった牛馬などの多用によって生産性の向上が図られたため総じて、1人当りの食糧消費と1人当りGDPは大幅に改善した。

黒死病は人手不足と賃金の上昇、農民の地位の向上と領主層の没落、市場化と都市化を伴う商業などの非農業部門の発展を促し、封建制度の根幹を揺るがす経済社会的な大変動をもたらした。黒死病後長期にわたる人口減少、賃金、物価の上昇、小氷河期に南下した北方民族の定着化、築城法の変化による軍事革命(Parker)などの複合的な要因によって封建制は崩壊した。その後漸く人口が黒死病以前の水準に復帰する時期に人口は急増期に入った。

## 6. 新大陸の発見と中国の富へのアクセス

15世紀末から16世紀初にかけての「大航海時代」の幕開けの時期において三つの「発見」がたてつづけに行われた。その第一はコロンブスによる新大陸の発見である。コロンブス自身は自分が発見したのはインドだと信じていたといわれるが、その「発見」が南北アメリカからなる広大な新大陸へのヨーロッパの進出の契機となったのであるからその意義は大きい。第二はガマによる喜望峰経由のアジア航路の「発見」である。これによって喜望峰以遠のヨーロッパ西側の諸国が、古くから東西間の交易の舞台となったインド洋・東南アジア海域と直接つながったわけで、ヨーロッパがその後この海域に本格的に進出する道を開いたことの意義は大きい。第三の「発見」はマゼランによる世界一周航路の発見である。マゼランは大西洋を横断し南米大陸を南下し南端に近い海峡(後にマゼラン海峡と呼ばれた)を経て西に向かいフィリピンまでたどり着いたところで客死したが、船団と乗組員の一部が、出発後3年かかって喜望峰を逆に回り、グアダルキヴィール河を遡上してセビリヤに帰投した。5隻で出発した船はわずか1隻に減り、250名いた乗組員は食料の不足や壞血病に倒れわずか35名に減っていた。マゼランの功績は発見されたばかりの新大陸を太平洋ルートで東南アジア海域と結びつけ、そのことを通じて中国が全世界的な交易網に本格的に組み込まれる端緒を開いたことである。

「大航海時代」はヨーロッパ側からの開拓者精神による能動的な事業だったとの評価もあるが未知の大陸にあるインド、中国、日本などの金銀や香料など富の獲得をめざしたものであったことは周知の事実である。またこれらの航海は「大西洋の時代」の幕開けだったという評価が一般的で、コロンブスによる新大陸の発見が最大の出来事と見なされることが多い。もちろんそのことの重要性は否定できないが、大西洋と太平洋が接続され、世界最大の経済大国だった中国が世界交易に本格的に登場したこと及びそれがもたらした影響の大きさを考慮すると、「大航海時代」はグローバリゼーションの時代の始まり(Flynn,

2006) だったといってよく、ヨーロッパにとっては、新大陸の銀の獲得により、中国の絹や陶磁器などの工業製品の輸入が可能になったことは量り知れない重要性をもった。

しかし、産業革命にいたる道のりはなお遠く、17世紀にはグローバルな危機 (Parker, 2013) を迎えることになる。

#### 参考文献

- Bairlock (1982) International Industrialization Levels from 1705–1980, *Journal of European Economic History* 11
- Behringer, Wolfgang (2010) *A Cultural History of Climate, Polity*
- Bozhong, Li and Jan Luiten van Zanden (2012) Before the Great Divergence?, *Comparing the Yangzi Delta and the Netherlands at the Beginning of the Nineteenth Century*
- Broadberry, Stephen, et al. (2010) *British Economic Growth, 1270–1870*, Macmillan
- Christian, David (2004) *Maps of Time*, University of California Press
- David D. Zhang, et al. (2007) Global Climate Change, War, and population Decline in Recent Human History, PHAS, december
- Elvin, Mark (1972) The High-Level Equilibrium Trap, in W.E. Willmott, ed., *Economic Organization in Chinese Society*, Stanford University Press
- Elvin, Mark (1973) *The Pattern of the Chinese Past*, Stanford University Press
- Fairbank, J. K. and Merle Goldman (2006) *China: A New History*, Harvard University Press
- Flynn, Dennis O. Glahn, and Giraldez (2006) Globalization Began in 1571 in Gills, Barry K., And Willam R. Thompson, eds., *Globalization and Global History*, Routledge
- Glahn, Richard Von (1996) *Fountain of Fortune: Money and Monetary Policy in China, 1000–1700*, University of California Press
- Jones, Phil D. et al. eds. (2001) *History and Climate*, Klauer
- Hatcher (1977) *Plague, Population and the English Economy 1348–1530*, Macmillan
- Lavelly, William and Bin Wong (1998) Revising the Malthusian Narrative: the Comparative Study of Population Dynamics in Late Imperial China, CSDE Working Paper No. 98–05
- Lee, James and Wang, Feng (1999) *One Quarter of Humanity*, Harvard University Press
- Maddison, Angus (2007) *Contours of The World Economy: Oxford University Press*
- Malanima, Paolo (2009) *Pre-Modern European Economy*, Brill
- Paker, Geoffrey (1988) *The Military Revolution*, Cambridge
- Paker, Geoffrey (2013) *Global Crisis*, Yale
- Pomeranz, Kenneth (2000) *The Great Divergence*, Princeton University Press
- Rosenthal, Jean-Laurant and Bin Wong (2011) *Before and Beyond Divergence*, Harvard University Press
- Sussman, George D. (2011) Was the Black Death in India and China? *Bulletin of the History of Medicine*, 85, 319–355
- Temple, Robert (2007) *The Genius of China: 3000 Years of Science, Discovery and Invention*. Inner Traditions, Rochester
- Van Zanden, Jan Luiten (2010) Before The Great Divergence?, CEPR Discussion Paper 8023
- Wickham, Chris (2005) *Framing the Early Middle Ages*, Oxford University Press

- ウエーバー, マックス (原書 1924 年) 「一般社会経済史要論」上巻, 岩波書店  
梅棹忠夫 (1957) 「文明の生態史観」, 中央公論 1957 年 2 月号  
ブロック, マルク (原書 1939 年) 新村猛他訳, 「封建社会 I」, みすず書房  
ベルジェ, ジャック (原書 1996 年) 野口洋二訳, 「入門 12 世紀ルネサンス」, 創文社  
マルコ・ポーロ (2012) 「東方見聞録」, 岩波書店  
宮崎一定 (1950) 「東洋的近世」, 教育タイムズ社  
ルゴド, アブー (原書 1989 年) 佐藤次高訳, 「ヨーロッパ覇権以前 上下」, 岩波書店